

日常の活動にひそむチャンスから 外の世界にあるチャンスまでつかめるように

唐津西高校（佐賀・県立） 中西美香先生

目の前に転がっている チャンスを発見するには

唐津西高校で教頭を務める中西美香先生は、生徒によく「3C」の話をする。「チャンスがあればチャレンジして。それが自分のチェンジ、変わるきっかけになるから」と。

ただ、「チャンスは転がっていても意外と気づかない」とも思っている。今やっていることの中にひそんでいるのを見過ごしたり、一歩踏み出さないと出会えなかったり。だから生徒には「アンテナを高く張ってチャンスをつかんでほしい」という。

ではそのアンテナが高まるよう、教員にできることはあるのだろうか。中西先生は「外発的に始まるものを、どう内発的なものにもっていくか」を考えてきた。授業などで教員が計画した形で始まったことでも「自らやりたくなり、自分の可能性が広がるもの」を発見できるチャン

スがある。生徒がそう思えるように。

数学の教員として取り組んだのは、学習課題を生徒にとって身近なものにアレンジすることだ。商業高校では、部活動が盛んでスポーツへの関心が高いことに着目。教科書にある気温のデータではなく、生徒たちのスポーツテストの結果を基にデータ分析の授業を行った。すると「サッカー部と野球部、どの種目でどちらの運動能力が高いか」など、競技特性と各種目の相性を推しはかる自発的探究が始まり、最終的には校外の大会で成果発表する活動へと化した。

グループの活動では、与えた課題を、生徒が自分ごとにしていけるようにチーム構成も工夫する。

「互いの考えが広がるようにしたいなら『異質の集団』に、特定テーマへの考えを深めたいなら『同質の集団』にあえてしたりします。同じ市町村に住む生徒同士でグループ分けし、統計データを基にした地域分

生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

1 内発的動機が生まれるよう やるべき課題をアレンジ

目の前の生徒たちの興味・関心（または今の学校の組織文化）に合わせて、学校でやるべき課題を調整し、本人たちのやりたいことに繋がるように促す。

2 内発的動機が生まれるよう チーム構成を工夫

生徒同士や教員同士でチームを組む時は、目的に応じて異質または同質の集団にしたりと構成を工夫し、個々が主体性を発揮しやすい環境にする。

3 外と繋がることを応援し 選択や判断は本人に委ねる

生徒や同僚の先生に、外と繋がる機会を届け、以降の選択は本人に委ね、外部との関わりをなかで視野を広げたり、自身の強みを発見したりしてもらおう。



／ 中西先生の「現在地」 ／

探究活動を軸とする学校改革を
組織全体に広げようと邁進

普

通科改革の一環で、探究活動を軸とするコース制を導入した唐津西高校。校務分掌に「探究支援部」を新設、そのメンバーを中心に企画運営を進めている。中西先生は教頭としてその取組をサポートし、また、組織全体に熱を広げられるように「学年と分掌という縦と横を意識して」個々に働きかけている。

探究支援部の企画で、多様な社会人を招いて生徒がテーマ発表した際は、学年団の希望を基に人集めで協力。22人も集まり、担当教員から「楽しみになってきました」と言われ、それが嬉しかったという。

学校の異動や立場の変化で、やることが変わる教員という仕事。今自分に求められていることは何かを考え、「置かれた場所で咲くことができれば」と中西先生は言う。



社会人を招いたテーマ発表。外部の協力者から同僚の先生まで、中西先生は関わった人から「気づいたら巻き込まれていた」とよく言われるそうだ。

なかにし・みか ●前ページ写真中央。大学卒業後、佐賀県の数学科教員に。2018年に佐賀大学大学院学校教育学研究科(教職大学院)を修了、主幹教諭時代に同大客員准教授も3年間兼任した。現任校では教頭として普通科改革を推進、教育活動の柱に据えた探究活動にも注力。前ページ写真は、探究支援部の山口 崇先生(左)と、末松真樹先生(右)と共に。

「入口は個人の繋がりで、組織と組織の繋がりにしていきたいのです。外と繋がることで先生方の視野も広がりますし、外部の多様な意見を基に、時代の変化に応じた学校運営を皆で考えるチャンスも生まれます。今の時代はジグソーパズル型でなく、組み立てブロック型だと言われたりしますよね。生徒のキャリアも、学校のあり方も、枠に当てはめるといふより、自分たちで形から思い描き、柔軟に創造していくことができたと思っています」

生徒が「外に出る・外と繋がる」ことも積極的に応援してきた。「がんばっている生徒の興味・関心に合わせて『学校外の活動やコンクール、プレゼン大会の募集があるけど、やってみる?』と声をかけるんです。無理強いせず、やるかどうかの選択は生徒に委ねます」

生徒がやることを選んだら、発表や活動の準備をサポート。校外に出たら、あえて距離を取って見守る。「教員の目が行き届かないほうが、生徒は自分で考えて行動する」からだ。その外での挑戦が、仮に生徒目線で失敗に終わったとしても、「やつてみて課題がわかったなら、それも収穫だよ」と背中を押してきた。

「知らない世界を知っているなら考えにふれると、生徒の視野が広がります。日常では接したことのない人と関わるなかで、生徒のもつ良さが引き出されることもあります。外に出ることで巡り合えるそうしたチャンスを感じてほしいのです」

こうした思いは、ボランティア部の顧問を長年務めるなかで培われたという。ボランティア部の生徒は、高齢者や幼児と接したり、大人と協働したりと、多様な人と関わる。その選択の幅が広がったという。

「知らない世界を知っているなら考えにふれると、生徒の視野が広がります。日常では接したことのない人と関わるなかで、生徒のもつ良さが引き出されることもあります。外に出ることで巡り合えるそうしたチャンスを感じてほしいのです」

知らない世界との邂逅が
未来の選択の幅を広げる

「知らない世界を知っているなら考えにふれると、生徒の視野が広がります。日常では接したことのない人と関わるなかで、生徒のもつ良さが引き出されることもあります。外に出ることで巡り合えるそうしたチャンスを感じてほしいのです」

ここで新たな一面を見せて成長することが多かったのだ。学校でよく注意される生徒が、幼い子と接した時に自然にしゃがんで目線を合わせたのを見て、胸打たれたこともあった。

教職大学院修了後、中西先生は、生徒だけでなく、先生にも目を向け、組織運営に深く関わるようになった。見える景色が変化して選んだ道だ。

「アップしつつ、校内の先生にも『繋がりのある人や繋がりを深めたい人』について1カ月近くヒアリングし、皆の意見を反映して組織化した。その前の商業高校では、コロナ禍にオンライン教育推進プロジェクトを牽引。チーム構成では、ICTが得意で前向きな先生だけを集めるのではなく、苦手意識がある先生にも参加してもらい、異質な集団として多様な意見を出し合って、皆で挑戦できるやり方を模索した。」

チャレンジや学びの機会が
教員にもたくさんある学校に